弁護士日記

心頭滅却、火もまた涼し

美和　勇夫

山梨県（甲州）の塩山市に武田信玄の菩提寺である「恵林寺」という有名な寺がある。

西芳寺（苔寺・京都）、天竜寺（京都）と共に室町時代、禅僧、夢想国師の開山として有名で、「枯山水」、「心字池」は、同じく、夢想国師が開いた多治見の名勝、虎渓山永保寺に相通ずる。

○　○　○

長篠の戦いで信長の鉄砲軍に敗れた武田騎馬軍団は壊滅し、甲州侍は四方に逃げ散った。

武田勝頼のもとに、反信長軍として、はせ参じていた三名の重臣が、信長軍に追われたあげく、この信玄の菩提寺である恵林寺に逃げこんだ。

住職は、「快川紹喜」という高名な禅僧であった。

信長は、明智光秀を介し、しつように、三名の引き渡しを求めたが、快川和尚は、

「寺は、不可侵である」

「信長の命といえど、断じて渡せぬ」

と拒んで、三名を秘かに逃亡させた。

○　○　○

烈火の如く、怒った信長は、僧、稚児もろとも恵林寺を焼き払うことを命じた。

この時、快川大和尚は、百五十名の僧を従えその先頭に座して、

〝安禅、必ずしも山水をもちいず

心頭滅却すれば、火もまた涼し〟

と唱え、従容として、死にのぞんだといわれる。

恵林寺は、快川和尚、僧もろとも焼け落ちた。（のち、徳川家康が再興）

この快川和尚は、「美濃の国」の出身であり武田信玄が恵林寺へ特に招き寄せたという。

○　○　○

話は一転するが、去る九月一〇日夜、九時二〇分頃、出火した虎渓山「永保寺」は全山を朱に染めて炎上焼失した。

今春の「防火月間」の時は、雲水消防団が、消火ホースを持って活動していた新聞写真が報道されていたが…。

どの段階で火災が、発見され、どのような経過で、消火の力及ばず本堂が炎上していったのか、…刻々の経過は、虎渓山を愛する者、再建の寄付を仰がれる者としては、是非とも詳細を知りたいところである。

○　○　○

不景気、自己破産続出の時代である。

「税金でとられるも、寄付をするも同じ出費だ」という金持ちはともかく、そうでない世人は、経過もわからぬままに「そうか、本堂は燃えたのか」「それではさっそく再建の寄付だ」という気持ちにはなれないのではないか。

「かくかくしかじかの経過で、雲水ともども力及ばず永保寺本堂を焼失させてしまったけれども是非とも虎渓山再興の為篤志をお願い申しあげます。」と、申し述べるのがスジというものであろう。

（筆者は多治見市上野町在住）

☆　☆

☆　☆

☆　☆

☆　☆